

B-1 指導上の工夫

① 教材（地域素材）との出会いの場の工夫

自分達の買い物体験とお家の人の買い物の仕方には違いがあることを、調べ活動を通して見つけさせた。その気づきから、家の人がよく行く理由（＝お客さんが集まるひみつ）について考えたり話し合ったりする場をつくった。

また、家の人がよく利用していたM店が地域に2つあることも活用するうえで魅力的であった。そこで、事前にM店と連絡を取り合い、見学の際に説明やインタビューが可能かどうか、バックヤードを見せてくれるかなど綿密に打ち合わせを行った。児童とM店との関わりも配慮して今回はバスで5分のM店の方を教材として扱うことにした。その方が、全員の課題意識が高まったり共有したりしやすいと考えたからである

② 学習展開の工夫

今回、体験的学習をより学習に生かすためには保護者の協力も大切なポイントに位置づいた。お便りなどで見学のねらいや協力してほしいこと、活動内容なども知らせ学習の理解に努めた。また、総合的な学習の時間や国語の時間に学んだ電話依頼の仕方、見学時のマナー、インタビューの仕方、お礼の書き方なども活用することができた。

グループで自分なりのひみつを見つける作戦（見る視点）を立てたことで、グループの仲間が一体となって、安心感のもと調べ活動を行っていた。また、消費者の立場から店を見る体験も取り入れたことで、友達との関わり・店員さんとの関わり・店長さんとの関わり・地域との関わり・家族との関わり・学び方との関わり・教材との関わり・先生との関わりなどが濃密になったのではないかと考える。

そして、自分の学習をふりかえり、話し合い、考え、まとめ、課題解決していく手段として、今回は、自分が見つけた「ひみつ新聞」をつくらせた。この活動を通して、子ども達は生き生きと自分なりの解決を見出し、達成感を得たようだ。また、そこから新たな疑問を発見し、取材や調べ活動などの体験活動をさらに取り入れたことで、個々の調べ方・学び方がとても上手になっていった。そのため、宣伝パンフレットづくりも、とても喜んで活動していた。

③ 指導法の工夫

1時間1時間、子ども達の課題意識を持続させるためには、学習していく思考の流れを切らずに、この単元でいったい何を新しく学ぶのかという、大きなスケールである単元全体を貫く学習課題を、教師がしっかりと教材と出合わせる前に持っていないといけないと考えている。今回は、<消費者の立場からスーパーのよさを考えていこう>と課題を設定した。そのため消費者の立場から「家の人はどこで何を買っているかな。」「なぜよくスーパーに行くのかな。」「お客さんにとってのよさは販売の工夫そのものだね。スーパーのひみつを見つけてこようよ。」「でも家の人はその他の店にも行っていたよ。なぜ行くのかな。取材してみよう。」「買いに行った時、何度でも来なくなるひみつを、店長さんになって紹介してみよう」と繋げていった。

その際に大事になってくるのが、教師の支援である。子ども達が問題解決できるように、考えた意見には共感して寄り添い、話し合いなどの結果は板書で視覚的にわかりやすくまとめることに心がけた。

また、次時への学習意欲の継続や新たな学習課題設定の手がかり、子ども達同士の考えの交流の場として、各単元の学習の足跡は教室内や廊下などに随時掲示していった。

